

九鬼周造の人生と哲学

古川 雄嗣（北海道教育大学旭川校）

はじめに

本日はお招きいただきまして有り難うございます。北海道教育大学旭川校というところに勤めております、古川雄嗣と申します。本日は「九鬼周造記念講演会」という素晴らしい企画の第一回の講演をさせていただくことになりまして、大変有り難いのはもちろんではございますが、むしろ申し訳ないと言いますか、私のような者で本当によろしいのでしょうかという思いのほうが強くございます。ともかくも、多少なりとも面白いと思っただけで興味をもっていただけのような話をしたと思っておりますので、どうかよろしくお願い致します。

私のような者でよろしいのでしょうかと申しましたのは、九鬼周造という人の哲学について、そのいわゆる哲学史的な意義や位置付けといった事柄——例えば、誰からどういう影響を受けているとか、同時代の哲学者と比べてどういうところにオリ

ジナリテイがあるとか、あるいは、その種の問題についてこれまでの研究で何が明らかになっていて、何がまだ課題として残っているのかとか——、そういったいわゆる学術的な哲学史や哲学史研究に関するお話であれば、私よりもっとふさわしい講演をしていただける方が、ほかにもたくさんおられるように思います。しかし、そう自覚しておりながら、なお私が本日の講演をお引き受けさせていただけようと思いましたが、誤解を恐れずに言えば、そういういわゆる学術的な九鬼哲学研究を少し離れて、少々そのあたりのことがよくわからなくても、それでも、なんとなくでもよいからわかる、あるいはわかるような気がする、そういう九鬼哲学の魅力のようなところを、ぜひ一人でも多くの方にお伝えしたいという思いが、私にはありましたが、でございます。

というのは、誤解を恐れずと言っておきながら、なるべく誤解がないように断っておきますと、私は決して、厳密で学術的な哲学史研究などただ煩瑣なだけで無意味であるとか、哲学というものは本来、誰にでもわかるものであって、それを一部の人間にしかわからない難解なものにしてしまっているのは学者の罪であるとか、そういう今流行りのことを申し上げたいのではありません。昨今はどうもそういう「哲学をすべての人に」という考えや運動が盛んになっていて、それはそれで間違いではないと思いますし、ほかならぬ私自身もその種の入門書を書

いたりなどしておりますけれども、それはあくまでも、まさに「入門」であって、それによって哲学そのものがわかるわけはありません。やはり、本当に哲学がわかるためには、二千年に及ぶ哲学の歴史を知らないことには話になりませんし、そこで培われてきた特有のいわば思考の作法のようなものに習熟する必要があるものであって、それは大変な勉強や訓練を要するものだと思います。そういう勉強や訓練を経ることなしに、哲学は本来誰にでもわかるはずのものだと安易に言ってしまうのは、言うならば高度な数学や物理学が勉強しなくても誰にでもわかるはずだと言っているのと同じでありまして、まったくナンセンスなことだと私は考えています。

しかしながら、それでもなお、それは哲学という学問の「本質」ではない、というふうにも私は考えています。あるいは、それは哲学の「目的」ではない。あくまでも、それは哲学の「手段」であって「目的」ではない。そういうふうには私は考えています。では、哲学の「本質」ないし「目的」とは何かと申しますと、それは——これも、こういう言い方をあまり好まれない方もおられることは承知していますが——やはり私は、人間の生き方、あるいは自己の生き方を問う、ということであると考えています。と申しますか、そう考えなければならぬのではないかと考えています。ある哲学者が、誰からどういう影響を受けたとか、その哲学が哲学史の中でどういう系譜に属し

ているのかとか、他の哲学者と比べてどこが同じでどこが違うのかとか、そういうことは、確かにその哲学を厳密に正確に知るためには、せひとも欠くことのできない大事な研究ではあります。しかし、それを明らかにすること自体が目的であるのではない。そうではなくて、そういった事柄を十分に踏まえた上で、だからどうなのか、ということ。その哲学は、結局のところ、どのような人間の生き方や社会のあり方、あるいは世界のあり方を指し示しているのか。それは今を生きる私たちにとって、どのような意味を持つのか、あるいは持たないのか。そういう問いこそが、哲学と哲学研究の本質であると、考えなければならぬのではないかと、私は考えております。

というのは、このことは、何も私のような浅学菲才の青二才が勝手に喚いていることではなくて、従来、主としてやはり二十世紀以降ですが、多くの哲学者や思想家が、様々な形で警鐘を鳴らしてきたことでもあるからです。九鬼自身の話に入る前に、一つだけ、私が若い頃に読んで大変印象に残っているテキストを紹介させていただきたいと思えます。これは『ナルニア国物語』などで有名なイギリスの文学者で、キリスト教の神学者でもあったC・S・ルイスが、一九四二年に書いた『悪魔の手紙』という著作に出てくるものです。この著作は、いかにもイギリスのファンタジー作家らしい想像力を駆使して、ベテランの悪魔が駆け出しの悪魔に対して、人間を誘惑して墮落させ

るための方法を書簡形式でレクチャーするという、大変面白い形式を用いた文明批評の作品なのですが、その中でルイスは、悪魔がどのような巧妙な働きかけによって、人間の学問、特に哲学を、悪魔にとって都合の良いものに墮落させたかについても述べています。

古文書を読むのは学問のある者だけだ。しかもそうした知識人たちをわれわれ「悪魔——引用者」はじつにうまく料理してきた。だから現代の知識人は、古文書を読んでもそれによっていささかも知恵を得そうにない。われわれは歴史的観点というものを彼らのうちに植えつけることによって、これに成功した。歴史的観点到立つ学者は、昔の思想家が書いたものを示されるとき、さまざまな問題点を指摘するが、唯一の例外として彼が問わないのは、その著書が真実を語っているかどうかということなのだ。その思想家は誰から影響を受けたか、彼が書いていることは彼のほかの著書のうちの言説とどの程度に矛盾がないか、それが彼の学問的発展の、また思想史一般のどの段階に属しているか、それは後世の学者たちにどういった影響をおよぼしたか、どのようにしばしば誤解されたか（とくに彼自身の同僚によって）、過去十年間のそれにたいする批判の一般的動向はどのようなものだったか、「現在の問題」はどのよ

うな性質のものか——そういった点ばかりが取り上げられているのだから。というわけで、この思想家が書いていることは有益な知識を与えてくれるのではないかと考えたり、彼が述べていることが自分の思想を、あるいは行動を修正する根拠となりうるのではと予想したりすること——そうしたことは、愚にもつかぬ、おめでたい態度として斥けられるだろう⁽¹⁾。

私自身も、このルイスの批評はいささか耳が痛いものがあります。私自身も、哲学論文と称するものを書くとき、そこで問題にしているのは、まさにここで言われているとおり、「その思想家は誰から影響を受けたか、彼が書いていることは彼のほかの著書のうちの言説とどの程度に矛盾がないか」云々、といったことが大半であるような気が致します。繰り返しますが、私自身は、そういう研究は大事だと考えています。けれども、なぜ大事なのかと言えば、それはここで言われている「その著書が真実を語っているかどうかということ」、あるいは「この思想家が書いていることは有益な知識を与えてくれるのではないか」とか、「彼が述べていることが自分の思想を、あるいは行動を修正する根拠となりうるのでは」ないか、とかと考えるたりする、そのための手段として大事なのであって、それ自体が目的になってしまうのは、やはり哲学研究としては、本末転倒で

はないか。少なくとも、それはせつかく曲がりなりにも哲学を学んでいる者として、何とも「寂しい⁽²⁾」ことではないか。そういうふうにいるわけです。

1 哲学研究者と哲学者

さて、どうしてこうも長々と、九鬼自身には直接関係のなさそうな話を前置きさせていただいたかと申しますと、一つは本日講演の趣旨を説明させていただきたいということですが、もう一つの理由として、実は、今お話しした両面——つまり、厳密な学としての哲学史研究という側面と、哲学は読み手の生き方に示唆を与えるものであるという側面——、まさにその両面を豊かに兼ね備えているということが、九鬼周造という人の哲学の、一つの大きな魅力でもあると、私は考えているからです。

というのは、九鬼周造という哲学者には、有名な『いき』の構造⁽¹⁾や『偶然性の問題』といった、彼自身の哲学的関心を主題化した著作以外にも、『西洋近世哲学史稿』や『現代フランス哲学講義』、あるいは単行本にはなっていないが「ハイデッガーの現象学的存在論」といった、哲学や哲学史の研究ないし解説の著作も少なくありません。それらの多くは、彼の京都大学での講義ノートが、彼の死後に編集されたものですが、

「これが講義ノートなのか？」と目を疑うような、極めて綿密かつ体系的に整理されたものです。私自身、何人かの先生から口を揃えて、「哲学史を勉強するなら九鬼の講義録を読みなさい。あれほど厳密で正確な哲学史の解説はない」というふうに勧められたことがあります。とにかく厳密で正確な哲学史研究というのが、九鬼の仕事の大きな部分を占めていたことは間違いないありません。

このことについては、同時代の学者たちも口を揃えてそう評しています。例えば、今挙げたの『西洋近世哲学史稿』を編集したのは、彼のいちばんの親友で、この甲南大学さんに九鬼周造文庫をつくってくださった天野貞祐先生ですが、その天野が「あとがき」の中で、この講義ノートの編集作業を回顧して、こう書いています。「英独仏語はもちろん古典語も達者でさまざまな引用があり」、「しかも何事にも実に精密で、私などの考からはどちらでもよいと思われる事柄に至る迄すべて正確綿密を極めた学者の草稿」を整理するのは本当に大変な仕事だった、と⁽³⁾。もちろん、その厳密さは、内容についてはもちろんのこと、形式についても同様で、講義ノートという性格のものであるにもかかわらず、誰のどの本の何頁からの引用であるとか、この指摘は誰がどこに書いていることであるとか、そういったことが、事細かに注記されていたりもします。そしてもちろん、この種の厳密さは、他のすべての著作についても、まったく同

様です。

よく言われることですが、こういうところは、例えば同時代の西田幾多郎とは非常に好対照です。西田の場合、特に何の注記も出典も示さないで、例えば「アウグステイヌスはこう言っている」とかと書くわけです。そして現代のアウグステイヌス研究者が、こんなことをアウグステイヌスはどこで言っていたかしらと思って、一生懸命探してみても、結局どこにも書いていない。どうやら完全に、西田自身の哲学の中に、いわば換骨奪胎されて吸収されてしまっているわけです。こういう人、つまり誰がどう言っているとかではなくて、あくまでも自分自身で思索する人のことを、しばしば「哲学者タイプ」と言ったりしますが、西田はまさにその典型です。しかしながら、九鬼はそういうことは絶対にしません。再び天野の言葉を借りれば、彼の哲学研究の態度は「飽くまでも没主観的客観的科学的^④」です。そういう意味で、九鬼は典型的な「哲学者タイプ」であるとも言えます。

こういう彼の、あくまでも客観的な正確さを期そうとする、非常に厳密な哲学者としての態度は、一方では、まさに哲学研究のお手本のようにだと、非常に高く評価する人も少なくありませんが、他方では、もうひとつ面白みに欠ける、という声を聞くこともまた、少なくありません。特に、西田幾多郎や、田辺元、西谷啓治といった、いわゆる京都学派のいわば「本流」

の哲学者たちと比べると、彼らはまさに人間の生死を切実に問うような、ぎりぎりの切迫した苦悩の中で、それぞれの哲学を展開していたのに対して、どうも九鬼にはそういう切実さや切迫性が希薄で、どこか一歩引いたようなところがある。まさに文字どおり「客観的科学的」で、なにやら無味乾燥な論理分析をしているだけのようにも見える。そのせいか、彼の渾身の主著である『偶然性の問題』にしても、「退屈でつまらない」「昔一応は読んだがあまりよく覚えていない」「途中で挫折した」等々といった声を耳にすることも、実はしばしばあります。要するに、「彼は哲学史の研究者や解説者としては優れていたが、自ら思索する哲学者としてはどうだろうか」というような評価が、一方に根強くあるように思われます。

しかし、果たしてそうか、ということをも、まずは問うてみたいのです。というのは、その九鬼が、「哲学とは何か」を学生たちに講じた講義ノートの中に、例えばこんなことを書いています。

我々は何等かの意味で現代の問題を捕えなければならぬ。哲学を研究するものは現代の問題に悩むものでなければならぬ、そうして一方に現代の哲学上の問題が哲学史の背景なくしては理解出来ない様に、他方には又現代の哲学問題の理解を有たなければ哲学史の攻究は徒勞である。哲学史

を単なる哲学史として研究することは世の好事家に委ねて置けばよい。哲学の学徒は狐に憑かれた者の様に哲学の問題のために病み且つ悩む者でなければならぬ⁵⁾。

このように、九鬼ははっきりと、「哲学史を単なる哲学史として研究すること」は「徒勞」であり、そんなものはせいぜい単なる物好きのやることにすぎない。つまり、「単なる哲学史研究」は「哲学」ではないのだと断言しています。そして、哲学というものは、現代の問題に苦悩するものでなければならぬ。何かしら現代の問題への苦悩というものがあって、それがあくまでも哲学の本質である。その上で、哲学史の研究は、その現代の問題を、まさに問題として捉えるための背景として、必要なものである。そういう捉え方をしています。ちょうど私が本日冒頭で申し上げたことと、基本的に同じことを言っているのを見てよいのではないのでしょうか。哲学史の研究が不要であるとか、哲学史を勉強しなくても哲学はできる、などというわけでは全然ない。それを踏まえなければ、そもそも問題を問題として捕まえることもできない。けれども、それはあくまでも、問題を問題として正しく捉え、正しく考えるための手段であるのであって、哲学の目的は、あくまでも、何か我々が生きるということに深く食い入るような苦悩なのだ、と言っているわけです。

さらに、同じところで、彼はこんなふうにも書いています。

哲学は個性の体験から生れるのである。哲学は固より体験其物ではないが、体験に基いた認識である。「偉大なる思想は心から来る」。そうして事物の深い心の鼓動と共鳴するには深刻な体験に依らなければ出来ないのである。パスカルは「呻きながら索ねる者の外は自分は自分は承認することは出来ぬ」と云った。凡そ人間の悩みから生れ、人間の悩みに訴える哲学でなければ生命を有った哲学ではない。安価な光と素朴な白昼に安んじて居る者には哲学は生れて来ない。胸に暗黒なものを有って、暗黒のために悩まなければ哲学らしい哲学は生れて来ない⁶⁾。

こんなふうに見える九鬼が、単なる哲学史研究や、単なる客観的科学的な論理分析に終始するような哲学を、するわけがありません。そこでは何か、彼自身が抱えた胸の暗黒や苦悩しかも彼の独自の体験に基づいたそれが、問われているはずです。そして実際、そのことがわかってくると、つまり彼が結局のところ哲学によって何を問いたかったのかということが、読み手である我々にもまさに問題として捕まえられてくると、一見、先ほどの天野の言葉を借りれば「どちらでもよいと思われ

る事柄に至る迄すべて正確綿密を極めた」彼の無味乾燥で退屈

にさえ思われるような記述の一つ一つが、実はそれらはどれも抜き差しならない問いを問うために必要なものなのだということがわかってきて、いわば生命をもってくるような感覚を得ることがができます。そういうふうには、九鬼自身の「個性の体験」に基礎をもつ人生上の生々しい問いと、あくまでも厳密で客観的な哲学（史）研究との両面が織り合わされているということに、九鬼周造という人の哲学のいちばんの魅力があるように、私は感じています。

2 なぜ「偶然性」だったのか

さて、それでは、その彼の哲学の根本にあった「暗黒なもの」、そしてそれがそこから生まれてきたという彼の「個性の体験」とは、どのようなものであったのか。それを簡単に考えてみたいと思います。

幸いなことと言うべきか、彼は哲学論文のほかに、かなり多くの随筆を書いておりまして、そこに彼の人生上の様々な体験が、かなり率直に書き綴られています。これは意外に大事なことで、実は彼にとって、随筆と哲学とは、いわば相補い合うものであったと考えることができます。というのは、先ほど見たように、彼は哲学とは、「個性の体験から生れる」ものであり、「体験其物ではないが、体験に基いた認識である」と言っ

ていました。ですから、簡単に言うと、その「個性の体験」を、「体験其物」として、なるべく「ありのままに」記述するのが、彼にとつての随筆であって、そして、その「体験其物」に論理的分析と概念的言表を加えるのが哲学であった、と考えることができます。実際、彼は別のところで、「哲学は体験存在を有りの儘に把握した上で更にそれを論理的判断の形で言表することを本質とするものである」とかというふうにも言っています。したがって、私たちは彼の随筆から、彼の哲学の根本にあった体験や苦悩のありようを、かなり如実にうかがい知ることがができます。そして、それはどうやら、とりわけ彼の青少年時代の体験にあったということがわかります。

まずは、彼の生い立ちを簡単に見てみたいと思います。そもそも、彼の「九鬼」という名字は大変珍しいものですが、わりあいよく知られているように、彼の家は、いわゆる戦国時代に織田信長や豊臣秀吉に仕えた九鬼嘉隆という武将にまでさかのぼることがができます。九鬼嘉隆は当時のいわゆる海賊でありまして、水軍を率いて織田・豊臣に仕えて活躍しました。その後、関ヶ原の戦いの際には、嘉隆が西軍、息子の守隆が東軍に付くという形で家の存続を図りまして、その結果、息子の守隆のほが徳川家の下で鳥羽藩の大名になります。その後、お家騒動があつて、九鬼家は摂津三田藩と丹波綾部藩に移封されますが、その両藩は江戸時代を通じて存続しました。九鬼周造はその子

孫ですから、いわゆる華族の家柄で、彼の父の隆一は男爵に叙せられていました。九鬼と親交があった人たちは皆、口を揃えて、とにかく九鬼先生は雰囲気や立ち居振る舞いに気品があって貴族的な人だったと言っておりまして、西洋留学中はパロン・九鬼とも呼ばれていたとか自称していたとかという話も伝わっていますけれども、彼はいわば、文字どおりの貴族であったわけです。

当然、非常に裕福で、外面的物質的には大変恵まれた境遇でした。どれくらい裕福だったかという点、例えば彼は西洋留学中に、当時失職していた新カント派のリッケルトを、多額の報酬を支払って家庭教師として雇っています。しかも、そのおかげで失職していたリッケルトは随分生活が助かったという話も伝わっているほどです。だいたい、私費で足掛け八年も留学していて、帰国したのも、天野から「いいかげんそろそろ帰ってきて日本の学問のために尽くしてくれないか」と言われて、ほとんどしぶしぶだったかのように書いていますので、経済的な苦労とはほとんどまったく無縁だったようです。こういった点も、西田幾多郎をはじめ、わりあい当時の京都学派の哲学者たちは、決して裕福ではない中で苦学して哲学を学んだ人が多かったですから、九鬼はかなり異質です。ひよつとしたら、こういうところも、彼の哲学はどこか高踏的でいけ好かない、というような印象に影響しているのかもしれない。

それはともかく、しかし他方で、彼の内面的精神的な生活は、決して穏やかなものではなく、かなりつらい体験をしております。これは、彼の家庭環境の複雑さに起因するものでした。

というのは、これもよく知られた事実です。ご存じの方も多いかと思いますが、彼はあの岡倉覚三（天心）との間に、複雑な関係をもっていました。どういふことかと言いますと、周造の父の九鬼隆一は、慶應義塾で学んだのち、文部省に出仕して、一時は「文部省の九鬼か、九鬼の文部省か」とささやかれるほど出世して権勢をふるいました。しかし、初代文部大臣の座を森有礼と争って敗れると、彼は特命全権公使としてワシントンDCに赴任します。

この九鬼隆一という人物は、特に文化政策の方面で活躍した政治家として知られておりまして、例えば古社寺保存法（今の重要文化財保護法）を制定して伝統的な文化財を保存しようとしたのも彼です。そして、その過程で、岡倉をパトロンとして支援して、二人は盟友のような関係にありました。

ところが、この岡倉が、隆一の妻、周造の母親である波津という女性と、いわゆる不倫の関係になってしまいました。しかも、それは周造の誕生がきっかけでもありました。というのは、ワシントン在任中に、波津が周造を身籠って、日本で出産するために波津だけが日本に帰ることになります。その際に、たまたま時を同じくして岡倉がアメリカから日本に帰ろうとしてい

ましたので、いわば岡倉が波津のエスコート役として、日本まで同行することになりました。そのときに、二人はその関係に陥ったわけです。

この波津と岡倉との関係を、隆一も事実上黙認していて、帰国後も、隆一と波津は別居の状態で、波津の邸宅には岡倉が頻繁に出入りしていました。周造は父と母の家を行き来するような生活だったようですが、そういう環境の中で、岡倉を「おじさま」と呼んで慕っていて、岡倉も随分周造を可愛がったようです。その様子は、周造の晩年の随筆である「岡倉寛三氏の思出」などにかなり鮮明に描かれていて、非常に印象深いものがありますので、ちょっと見てみることにしたいと思います。

或る時、私が風邪を引いて寝ながら絵本を見ていた。廉頗と藺相如とが刎頸の交をする画もあった。岡倉氏はその説明をしてくれてどうだ伯父さんと刎頸の交をしようじゃないかと云って私の小さい腕をギュッと掴んだ。私はその時だけはこわい伯父さまだと思った⁸。

岡倉氏自身も支那人が驢馬に乗っている画を私に描いてくれたことがある。その画もまだありありと覚えている。岡倉氏はまたお父さんに云って驢馬を買ってもらってあげよう。驢馬に乗って学校へ通えばいいと云った。私はいつ三

年町〔隆一の家〕から驢馬が来るか来るかと待っていたが、驢馬はとうとう来なかった。それから岡倉氏は小供にはプランコのようなものが必要だ。お父さんに云ってこしらえてもらってあげようと言った。間もなく庭の真中にプランコができた⁹。

このような回想からは、周造があなたも岡倉を「もう一人の父」のように慕っていたような様子がうかがわれるように思います。実際、こんな回想もあります。

岡倉氏は筑波山へ狩猟に連れて行ってくれたこともある。氏の長男一雄氏と私の兄と私の四人で行った。山中で道に迷って困ったことや、馬に乗って山麓の畑中を行つたことなどを覚えていいる。茶店で休んだとき、店の婆さんが岡倉氏と私とを見較べて、まあ坊ちゃんはお父さんによく似ていらつしやるとお世辞を云った。岡倉氏は黙ってただ笑っていた¹⁰。

おそらく、周造は、本当に自分は隆一の子なのか、ひよっとしたら自分は岡倉の子なんじゃないか、と思つたこともあつたのではないのでしょうか。あるいは、たえそうでないにしても、岡倉が自分の父だった可能性もあつたのではないか。そんなふ

うに思ったことくらいはあったのではないかと思われまふ。つまり、ここには、自分が「この」自分であるということの不確かさの感覚があります。そしてまた、ここからは、自分が「この」自分ではなかった可能性、「他でもあり得た」可能性、といったものが考えられてきます。実はこれこそがまさに「偶然性」という問題であるわけですが、複雑な家庭環境の中で、周造は少年の頃から、後にそういった概念とへ結実していくことになる様々な想念を、思い巡らせていたのではないかと思われまふ。

さて、他方で、こういう環境ですから大いにあり得そうなことだとも思いますが、周造は今風にいうところのママっ子と言いますか、わりあい母親に甘えるタイプの子だったようです。「わたしは母には随分甘えていた。風呂へは母に入れてもらっていた。ママのここから生れたのだと云って母がへそのあたりを指したこともあった¹¹⁾」と彼は書いています。ところが、この最愛の母親が、つらい「悲惨な運命」に見舞われることになりまふ。

というのは、一八九八年、つまり周造が十才のときですが、いわゆる美術学校騒動という事件が起こって、岡倉の東京美術学校追放が画策されます。このときに、岡倉の人格を誹謗中傷する怪文書が出回り、岡倉は人の妻女を強姦する獣のような人間だという表現で、波津との不倫関係が仰々しく暴露されて、

スキヤンダルになってしまいました。そのせいで、これまで二人の関係を黙認していた隆一も、波津を岡倉から引き離すべく京都に住まわせ、しかし波津はすぐに逃げ帰り、といった具合に、九鬼家ははやかに混乱状態に陥りました。そして結局、隆一と波津の離縁が成立した一方で、岡倉は波津との関係を絶ちまふ。そうして、騒動で心身が疲弊する中で、隆一とも岡倉とも引き離されて孤立してしまった波津は、やがて重い精神疾患に陥って精神病院に入院してしまいます。彼女は結局、そのままそこで生涯を終えることになってしまいました。

このときの母親の姿が、生涯、周造の脳裏に焼き付いて離れなかつたようです。随筆にはこのように書いています。

或る日曜の朝早く起きて母の家の庭で一人で遊んでいると岡倉氏が家から出て門の方へ行かれるのとヒョッコリ顔を見合わせた。その時の具体的光景は私の脳裏にはつきり印象されているが、語るに忍びない。間もなく母は父から離縁され、「やがて発狂した¹²⁾」。

最後の「やがて発狂した」という箇所は、全集版では「……」と三点リーダーで潰されているのですが、私は実見できていませんが、この甲南大学さんの九鬼周造文庫に保管されている原稿では、「やがて発狂した」と書かれているそうです¹³⁾。それ

はともかく、この随筆が書かれたのは周造が五十才頃のことです。それでも「その時の具体的光景は私の脳裏にはつきり印象されている」というわけですから、本当に、一生焼き付いて離れなかった、おそらくはほとんどトラウマのようなものとなっていたのだと思います。

そしてまた、この事件の後、周造は岡倉と顔を合わせることもなくなってしまう、かつては「おじさま」と呼んで慕っていた彼とも、すっかり疎遠になります。のちに周造が東京帝大に在学していた頃は、ちょうど岡倉が東洋美術史の講義をしていたのですが、周造は「私的感情に支配されて遂に一度も聴かなかった」と書いています。一度構内ですれ違ったこともあったようですが、そのときも「下を向いたままでお辞儀もしないで行き違ってしまった」。「私がいつたいひっこみ思案だからでもあるが、母を悲惨な運命に陥れた人という念もあって氏に対しては複雑な感情を有っていたからでもある」と⑭。

なぜこんなことになってしまったのか。ここで「悲惨な運命」という言葉が使われていますけれども、まさに、いったいどうして、母はこのような運命に陥ってしまったのか。いや、そもそも運命とは何なのか。これは初めから決まっていたことなのか。それとも、単なる偶然の結果なのか。偶然だとすれば、そうならない可能性もいくらでもあったということになる。母が岡倉と出会わない可能性もあつたし、岡倉と平和に暮らしてい

た可能性もあつた。他の無数の可能性があつたはずなのに、なぜ、よりによって、この悲惨な現実が、現実になってしまったのか。そこには何か理由があるのか……。周造ならずとも、我々も何か、まったく意図しなかった悲惨な出来事に遭遇した場合、このような問いを抱くのではないでしょうか。そしてこの問いは、先ほど見た、自分が「この」自分でなかった可能性、という問題とも、畢竟、根を同じくするものです。つまり、一言で言えば、これは、なぜ現実が「この」現実であるのか、という問いであると言いうことができます。

このようにして、九鬼は主に青少年時代の数奇な体験に基づいて、いわば、現実が「この」現実であるとはどういうことか。なぜ他の現実ではなく「この」現実なのか。そして、さらに言えば、不幸な現実、悲惨な現実を背負うことになってしまった人間は、いったいいかにその現実を生きればよいのか。あるいは、その現実を受け入れることができるのか。そのような問いを、「暗黒なもの」として、胸に抱くようになっていったのではないかと思われまます。

そして、言うまでもなく、この問いは、「必然と偶然」「運命と自由」といった、哲学史上、二千数百年にわたって問われ続けてきた哲学問題にはかなりません。さらには、単に西洋哲学史のみならず、仏教思想を中心とした東洋思想もまた、問い続けてきた問いでもあります。最初に見たように、九鬼は「現代

の哲学上の問題は哲学史の背景なくしては理解出来ない」と述べていたわけですが、まさに彼は、自身の個性の体験を、単に個人的な体験そのものとしてではなく、このような哲学史上の問いとして、いわば問題化して、それに対して何等か彼なりの解答を与えるということに、哲学者としての生涯をかけることとなったわけです。

4 偶然を「運命」に変える

さて、では彼は、その問題に、どのような解答を、どのようにして与えたのか、ということですが、もちろん、それを今ここでお話することは到底できません。もし、本日の私の講演をお聞きになって、少しなりとも関心を抱いてくださった方は、ぜひとも九鬼自身の著作、中でもかねて申しております『偶然性の問題』を繙いてみていただきたいと思えます。実際彼は、『偶然性の問題』を書き終えた頃、このような短歌を詠んでいます。

偶然論ものしおはりて妻にいふいのち死ぬとも悔ひ心なし
一卷にわが半生はこもれども繙く人の幾たりあらむ¹⁵⁾

まさにこの一卷に、彼の半生、つまり青年時代以来の彼の苦

悩に対する哲学的解答が込められているわけです。だからこそ、「いのち死ぬとも悔ひ心なし」なのでしょう。「繙く人の幾たりあらむ」と彼は詠んでいますから、ぜひとも、一人でも多くの方に繙いていただきたいと思っております。

とはいえ、これだけで終わってしまってもいかにも尻切れトンボですので、過程は一切割愛せざるを得ないとしても、結論の部分だけは、ごく簡単に、ご紹介させていただきたいと思えます。

簡単に言ってしまうと、彼は結局、偶然性という哲学問題に対する最終的な結論を、一種の実践哲学として提示しています。つまり、まさに、最後は個々人の「生き方」の問題になってくるわけです。そして彼は、それを「運命」という概念で呼び表します。

ここが彼の偶然論の非常に独特なところでありまして、彼が最終的に示す「運命」という概念は、実は一種の実践的な概念なのです。このことは、あまりまだ九鬼研究において一般的な理解にはなっていないようですけれども、明らかにそうであるとは私は思っています¹⁶⁾。つまり、通常、私たちはよく、「偶然か、運命か」と問うたりしますし、実際哲学史上でもそう問われてきました。この場合の「運命」は、必然性とほとんど同義です。日常的にも、「これは私の運命だったのだ」という言い方をするとき、その場合の「運命」という概念は、あらかじめ

そう定められていたもの、というほどの意味です。これは、それ以外ではあり得なかつたもの、という意味ですから、すなわち必然性です。通常の哲学史においても、「運命論」と言えば、すべてが必然的に決定されていると考える、いわゆる決定論と同義です。従って、「偶然か、運命か」という問いは、「偶然か、必然か」という問いとほとんど同義です。そして、まさにこの「偶然か、必然か」という問いが、二千数百年に及ぶ哲学史を貫いてきた問いの一つでもあったわけです。

ところが、九鬼は、その哲学史を綿密に追いかけながら独自の徹底的な考察を加えた結果、やや乱暴な言い方をすれば、結局のところ、その問いは本来、問いとして意味をなさない、というところにたどり着きます。どうしてかというところ、結局のところ、一切は偶然でもあり必然でもある、というのが、彼の結論だからです。このことをまず、彼は「運命」と呼びます。だから彼は、運命とは「必然―偶然」ないし「偶然―必然」であると言います。

これはどういうことかというところ、一切の現実、その都度の瞬間の偶然として与えられる。瞬間瞬間に、まったくの偶然として、具体的な現実が与えられる。その意味で、確かに一切は偶然である。しかしながら、同時に、その瞬間瞬間の偶然は、時間の地平において完全に必然的に連結している。時間の地平において、原因のない結果というものはない。その意味で、一

切は必然である。

こういふふうには、いわば、垂直的に偶然であると同時に、水平的に必然である。これが現実の構造であると九鬼は言うわけです。そして、その意味で偶然と必然とが交わるところに、「必然―偶然」としての「運命」がある。そういうことになりました。

しかしながら、そうであるとすれば、その意味での「運命」というものは、その都度の瞬間に偶然として与えられる現実を、人間が時間の地平において必然化することによって、はじめて成り立つものである、ということにもなります。与えられた偶然の現実を、単なる偶然のままやり過すのではなくて、それを必然に変えることによって、はじめて偶然は運命に「なる」わけです。つまり、いわば勝義の「運命」とは、予めの決定として「ある」ものではなくて、人間の意志と行為によって「なる」ものである、ということです。

そして、人間が偶然を「運命」に変えることができたときにはじめて人間は、単なる無意味で無根拠な偶然の現実、意味を与えることができる。単なる偶然としては、まったく無意味で虚無的な人生に、意味を与えることができる。あるいは、意味を創造することができる。かくして、虚無に晒された自己の生に意味を付与することが、人間に与えられた「課題」である。こう彼は結論しています。このような、いわば「新たな運命論」

が、彼が自らの苦悩に対して与え得た、最終的な哲学的解答であつたと見ることができません。

それがはっきりと示されているのが、『偶然性の問題』の結びの一節です。

無をうちに蔵して滅亡の運命を有する偶然性に永遠の運命の意味を付与するには、未来によって瞬間を生かしむるよりほかはない。未来的なる可能性によって現在のなる偶然性の意味を奔騰させるよりほかはない。かの弥蘭の「何故」に対して、理論の圏内にあつては、偶然性は具体的存在の不可欠条件であると答えるまでであるが、実践の領域にあつては、「遇うて空しく過ぐる勿れ」という命令を自己に与えることによって理論の空隙を満たすことができるであろう¹⁷⁾。

ここにある「弥蘭の「何故」というのは、古代インドの仏教経典『ミリンダ王の問い』にある、次のような問いです。

なぜ、ある人は長命で、ある人は短命なのでしょう。なぜ、ある人は健康で、ある人は病弱なのでしょう。なぜ、ある人は強く、ある人は弱いのでしょうか。なぜ、ある人は賢く、ある人は愚かなのでしょうか。なぜ、ある人は美

しく、ある人は醜いのでしょうか¹⁸⁾。

『偶然性の問題』という著作は、結局、この「なぜ」にいかにか答えるのかを考究するという構造になっています。というのは、この著作は三章構成になっているのですが、その各章の最後で、常にこの「なぜ」という問いに立ち返っているのです。そして、その最終的な結論として示されているのが、「実践の領域にあつて、「遇うて空しく過ぐる勿れ」という命令を自己に与える」ということなのです。

この「遇うて空しく過ぐる勿れ」というのは、九鬼の造語でありまして、元々は『浄土論』にある「仏の本願力を観じては、遇うて空しく過ぐる者無し」という言葉です。「遇う」の「遇」は偶然の「偶」と同じで、これは偶然性を意味していると九鬼は言います。したがって、この言葉は「一切衆生を救おうとする仏の本願にあつては、空しく無意味に過ぎ去る偶然はない」といったほどの意味で引用されているわけですが、九鬼は、この「無し」を「勿れ」という命令形に改めて、いわば「偶然を空しく無意味なままにやり過ごしてはならない」というような意味の命令として、それを自己自身に与えなければならぬ、と言います。これが、私が先ほど申し上げた言い方で言う、「偶然を運命に変えなければならぬ」という、一種の道徳的な命令であるわけです。

とはいえ、これだけではまだ、まったく抽象的で、もうひとつ何を言っているのかよくわからないかもしれません。そこで最後に、私なりに、まさに現代の問題から、具体的な例を二つほど挙げて、考えてみたいと思います。

まず一つ目は、一九九九年に起こった、いわゆる「光市母子殺害事件」の被害者遺族である本村洋氏の事例です。彼は、残忍な犯罪によって妻子を殺された被害者遺族として、「全国犯罪被害者の会」を設立して、犯罪被害者の権利確立などを目的とする社会的活動を展開してきたわけですが、その彼が、二〇〇六年に出演したテレビ番組の中で、事件を振り返って次のような発言をしておられました。

ある方の本で、私の好きな言葉で、「人生とは偶然を必然にする過程である」という言葉がありました。ですから、私や私の家族に起きた事件は偶然かも知れない、でもその偶然をきっかけに一生懸命考えて、色んなことをすることで、いつか振り返ったときにですね、あの事件は必然だったんだと、あそこで、あの事件があったからこういうことが分かった、こういう新しい社会の問題が解決出来た、っていう風になればですね、けっして私は、私の身に起こった事件、そして私の妻と娘を奪った事件を無駄にしなかったんじゃないかと、思えるんですね⁽¹⁹⁾。

もちろん、この発言の真意は知るべくもありませんし、それを推し量ろうとするのも不遜であろうとは思いますが、ただ、この発言を独立したテキストとして取り扱うことをお許しただくとすれば、ここで言われている「人生とは偶然を必然にする過程である」という見方は（これが誰の本で言われていることなのかは私にはわかりませんが）、まさに九鬼のいう「遇うて空しく過ぐる勿れ」という命令を自己に与える」という生き方、偶然を運命に変えるという生き方そのものであると言つて差し支えないように私には思われます。

つまり、自分の身に降りかかった現実には、確かにまったくの偶然である。まったくの不幸な偶然である。けれども、「その偶然をきっかけに一生懸命考えて、色んなことをすることで」、「あの事件があったからこういうことが分かった、こういう新しい社会の問題が解決出来た」というふうになれば、「あの事件は必然だったんだ」と思える。これはつまり、与えられた偶然を、目的的に必然化するということ、もつとわかりやすく言えば——こういう考え方は、それはそれでかなり問題が残るということは自覚しているつもりですが、その点については今は触れないことにします⁽²⁰⁾——、与えられた偶然を、何らか未来の目的のための手段として生かす、ということの意味します。そして、その意志と行為によって偶然を必然化することができるとき、自分は与えられた偶然を、たとえそれがどれほど不幸

な偶然であったとしても、「無駄にできなかったんじゃないか」と思える。つまり、それを「空しく過ぐる」ことなく、いわば「せめてもの(21)」意味を、そこに付与することができる。そういうことであると思います。

そして、もう一つの例として挙げたいのが、つい最近の事例ですが、昨年四月に松本創さんというノンフィクションライターが書かれた『軌道——福知山線脱線事故 JR西日本を変えた闘い』というご本の内容です。かなり話題になった本ですが、どういふ内容かというと、二〇〇五年に起こった福知山線脱線事故の、これも被害者遺族の話です。この事故で長年連れ添った妻を亡くした浅野弥三三さんという方が、なんと驚くべきことに、加害企業であるはずのJR西日本と協力して、共同で事故の原因究明と今後の安全対策を行なったそうです。最初は、もちろん失意のどん底にあり、次いで、責任逃れに終始しようとする企業に対して激しく責任を追究するようになったわけですが、しばらくして、いろいろと思い直した結果、「責任追究は横に置く。それよりもやるべきことは、きちんと原因を究明して、同じ事故が起こらないようにきちんと対策をすることだ。そのために力を合わせようじゃないか」と言って、元々技術者でもあった自分の知識や経験も生かして、加害企業との共同に踏み切った。その一連の経緯を取材した作品です。

なぜ今これを取り上げたいかと申しますと、私自身少し驚い

たことに、この本の冒頭のエピグラフに、なんと先ほど私が引用した『偶然性の問題』の結びの言葉が掲げられているのです。そして、エピログの中でも、そのエピグラフに対応するように、こう書かれています。

浅野は、偶然を不条理のまま終わらせなかった。(……) いわば、事故の瞬間に未来から働きかけ、偶然性に永遠の意味を付与しようとした(22)。

実際、この浅野さんという方は、まさに「なぜこんなことになってしまったのか」という問いに苦しみ続け、それに対する一つの応答の形として、「遺族の社会的責務」ということを自覚するようになっていったと、この本では書かれています。

蛇足かもしれませんが、ちよつと裏話をしますと、私はこの本の著者の松本さんとは、直接の面識はないのですが、ちょうどこの本が書かれていたのと同じ時期に、同じ編集者のところで、私も本を書いていました。それで、その編集者が松本さんと話をする中で、知り合いに九鬼周造の偶然論と運命論を研究している奴がいるのだが、松本さんがこの本で扱っている問題はまさに偶然性の問題、偶然と運命の問題ではないか、という話になって、私が昔書いた「苦しみの意味と偶然性」という論文を紹介してくださったそうです。そしてそれをお読みくださっ

た松本さんが、まさにこういう問題なのだと、いたく九鬼の思想に共感されて、ぜひとも九鬼の『偶然性の問題』をエビデグラフに使わせてもらいたい、ということになったそうです。何を言いたいかと申しますと、やはりこの九鬼周造の「運命」の思想は、こういう形で、現代にあってもなお、大きな力を持つものなのだというのを、私自身、再認識させられたということです。

もちろん、この本で取り上げられている浅野さんや、一つ目の例で挙げさせていただいた本村さんのような生き方や考え方が、絶対的に正しいのであって、誰もがそのように行為しなければならぬ、と言ってしまうと、これは大変な問題であろうと思います。けれども、他方で、何か不幸な偶然を現実として負わされてしまった人間が、いかにその現実と向き合って生きていくのか、ということを考えるときに、「偶然を運命に変える」という九鬼の思想が、今なお大きな力を持つことがあり得る、ということもまた、否定できない事実であるとも私は思うわけです。

私は本日、冒頭で、私たちが哲学を学ぶということは、最終的には自らの生き方を考えるということであって、哲学書を読むときには、それが自分の思想や生き方をよりよいものとする根拠となり得るのではないかと考えることが、やはり本質的なことではないかということを申し上げました。九鬼周造の哲学

は、まさにそれに値する、彼自身の言葉で言う「生命を有った哲学」であって、それは彼の哲学が、長大な哲学史的展望の下に、人間が生きるということの苦悩にその根源をもつ、普遍的な哲学問題と正面から格闘したものであるからこそであると思います。本日の講演で、私は九鬼哲学の魅力をお伝えしたいというつもりでおりましたが、魅力というよりはむしろ、九鬼哲学にはそういう「力」があるのではないか、ということをもつて、本講演の結語とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

註

九鬼周造の著作からの引用・参照は『九鬼周造全集』（岩波書店、一九八〇—一九八二年）により、ローマ数字で巻数を、漢数字で頁数を記す。別は別巻を意味する。引用に際しては、旧字体は新字体に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。

- (1) C・S・ルイス『悪魔の手紙』中村妙子訳（平凡社、二〇〇六年）一六九—一七〇頁。
- (2) 九鬼は西洋留学中、「形而上学のない哲学は寂しい、人間の存在や死を問題とする形而上学が欲しい」と詩の中で詠っている（『秋の一日』、『巴里心景』I・一二九）。
- (3) 天野貞祐「後書」、『西洋近世哲学史稿 上』VI・三四〇。

- (4) 同上、VI・三三九。
- (5) 『現代フランス哲学講義』VIII・二九。
- (6) 同上、VIII・一三一―一四。
- (7) 『哲学私見』、『人間と実存』III・一一一。
- (8) 『岡倉寛三氏の思出』V・二三五。
- (9) 同上、V・二三四―二三五。
- (10) 同上、V・二三五。
- (11) 『根岸』V・二二八。
- (12) 『岡倉寛三氏の思出』V・二三七。
- (13) 高橋真司『九鬼隆一の研究——隆一・波津子・周造』（未來社、二〇〇八年）一五九頁。
- (14) 『岡倉寛三氏の思出』V・二三七―二三八。
- (15) 『短歌ノート』別・二五三。
- (16) 詳しくは、拙著『偶然と運命——九鬼周造の倫理学』（ナカニシヤ出版、二〇一五年）を参照されたい。
- (17) 『偶然性の問題』III・二六〇。
- (18) 『ミランダ王の問い（一）』中村元・早島鏡正訳（平凡社、一九六三年）一八一頁をもとに、引用者が要約。
- (19) 『報道ステーション』（二〇〇六年六月二十日放送）。放送は直接確認することができなかったため、以下のインターネット記事で参照したが、それも現在は削除されている。<http://blogs.yahoo.co.jp/bmb2mb413/19132647.html>（二〇一二年三月三十日閲覧）。
- (20) この点については、拙稿「苦しみの意味と偶然性——九鬼周造の

- 偶然論再考」（『人文学の正午』第三号、京都大学文学研究科二十世紀研究室、二〇一二年）や拙著『看護学生と考える教育学——「生きる意味」の援助のために』（ナカニシヤ出版、二〇一六年）において、若干の考察を行なっている。
- (21) 前掲拙著『看護学生と考える教育学』二九六頁以下、参照。
- (22) 松本創『軌道——福知山線脱線事故 JR西日本を変えた闘い』（東洋経済新報社、二〇一八年）三三三頁。

本研究はJSPS科研費17K13972の助成を受けたものです。

九鬼周造記念講演会

「九鬼周造の人生と哲学」コメント

長岡 徹郎（京都大学 非常勤講師）

本コメントでは私の関心である西田幾多郎（二八七〇―一九四五）や西谷啓治（一九〇〇―一九九一）、上田閑照（一九二六―二〇一九）らの哲学を導きとして、古川氏のご講演に対して二